

双極性障害におけるラモトリギンの有効血中濃度とその変動因子に関する研究

著者	坪内 清貴
著者別表示	Tsubouchi Kiyotaka
雑誌名	平成29(2017)年度 科学研究費補助金 奨励研究 研究概要
巻	2017
ページ	1p.
発行年	2018-12-20
URL	http://doi.org/10.24517/00060599

[◀ Back to previous page](#)

双極性障害におけるラモトリギンの有効血中濃度とその変動因子に関する研究

Research Project

Project/Area Number	17H00527
Research Category	Grant-in-Aid for Encouragement of Scientists
Allocation Type	Single-year Grants
Research Field	薬学Ⅲ－B
Research Institution	Kanazawa University
Principal Investigator	坪内 清貴 金沢大学, 附属病院, 薬剤師
Project Period (FY)	2017
Project Status	Completed (Fiscal Year 2017)
Budget Amount *help	¥310,000 (Direct Cost: ¥310,000) Fiscal Year 2017: ¥310,000 (Direct Cost: ¥310,000)
Keywords	ラモトリギン / 薬物血中濃度

All

Outline of Annual Research Achievements

LTGは双極性障害において標準治療とされる薬剤の1つであり、治療ガイドラインにおいて大うつ病エピソードの治療および維持療法として、単剤および他剤との併用による使用が推奨されている。しかし、もう一つのLTGの適応疾患であるてんかんにおける治療濃度域は報告されているが、双極性障害におけるLTGの血中濃度と効果や副作用との関係については十分に研究されていない。

本研究は、双極性障害患者におけるラモトリギン(LTG)の血中濃度を測定し、治療濃度域を明らかにするとともに、体格や併存疾患などLTGの血中濃度の変動因子についても調査することを目的とした。特に、UDP-グルクロン酸転移酵素(UGT)1A4、UGT2B7の遺伝子多型がLTGの血中濃度に変動因子として寄与したということもこれまでに報告されている。有効血中濃度とその変動因子を明らかにすることで、LTGの血中濃度の測定意義を明らかにし、患者への薬物療法への寄与を図る。

本研究を実施するにあたり、遺伝子情報を取り扱うこととなるため、ヒトゲノム・遺伝子解析研究倫理審査委員会に研究計画書を提出し、現在ヒアリングの後の修正を実施している。

臨床サンプルを用いた研究を実施するに当たり、市販血液を用いUGT1A4ならびにUGT2B7の遺伝子多型の解析法(RFLP法)の手法を確立した。また、検体のラモトリギン血中濃度の測定法としてHPLC法を用い適切な条件設定を確立した。今後、ヒトゲノム・遺伝子解析研究倫理審査委員会にて承認の後、患者からサンプルを入手し解析を実施していく予定である。

Report (1 results)

2017 Annual Research Report

URL: <https://kaken.nii.ac.jp/grant/KAKENHI-PROJECT-17H00527/>

Published: 2017-04-28 Modified: 2018-12-20